

「日々の理科」(第1911号) 2019, 10, -2

「チェキで”月”を撮る(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

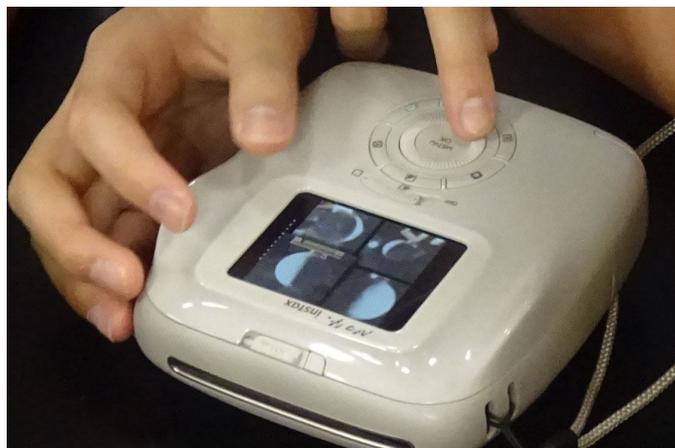
私が理科の授業で心がけていることの一つに「機会平等」ということがある。水溶液の実験も、顕微鏡観察も、何かを熱する実験も、必ずすべての子どもが「同じ回数」「同じ時間」操作するように指示を出している。協働して探究力を高める上で、このことはとても大切だと思っている。



チェキを使った「月の撮影」でも、研究所(班)の全員が同じ回数を撮影し、一人一枚の「ベストショット」を選ぶようにした。写真は、たくさん撮った写真の中からプリントしたい写真を相談している場面である。



撮ったデータの中から、プリントしたい写真を選ぶのも簡単な操作でできる。仲間と撮った写真をすべて比較しながら、いらない写真はその場で削除していく。画面下のリングを回すと、感覚的に写真を選択できるのが良い。



一つの研究班は4人が多い。「デジタル・チェキ」には「4分割プリント」の機能もある。一人一枚のベストショットを選んだら、それを4分割にしてプリントすることも可能だ。



4分割画面を表示した状態でプリントボタンを押すと、画面そのものが上にスクロールして、そのまま印画紙が出てくるように見える。子どもたちはこの仕組みに大喜びして、キャーキャー言いながら、一人一枚のプリントを楽しんでいた。



プリントボタンを押してから、終わるまではおよそ30秒。最初は真っ白だが、その後机の上に置けば、1〜2分で現像が終わって、画像が現れるのだ。